

# 「天茄」は「茄子」の代替とはならない

中尾本『奥の細道』の表記への疑問――

赤羽学

○残暑しはし手毎にれうれ瓜茄子（西の箋）

少幻庵にて

○残暑暫手毎にれうれ瓜茄子（花の故事）

平成八年十一月に芭蕉の自筆草稿本として発表された中尾本『奥の細道』の金沢の条に、  
ある草庵にいさなはれて  
秋すし手毎にむけや瓜天茄  
との芭蕉の句があり、それが曾良本に、  
ある草庵にいさなはれて  
秋すし手毎にむけや瓜天茄  
と写され、更に「き」が「さ」に「天」が消され、「茄」の下に「子」が補われ、それが素龍清書西村本に  
ある草庵にいさなはれて  
秋涼し手毎にむけや瓜茄子

に定着したことは、右の文献を信じた上での事実である。しかるに、元禄二年七月の現地金沢で執筆した句形は、

松玄庵閑会即興

であったことが金沢に残された資料によって知られる。「花の故事」にはこの後半歌仙が続き、「右歌仙一折、翁の真筆にて、小春が末葉湛水所持す」と付記されているから、この「残暑暫」の形がこの句の原形であった可能性が高い。「残暑暫手毎にれうれ」が「秋すし手毎にむけや」に推敲されたことは、そのまま信ずることができ、が、「瓜茄子」が「瓜天茄」に変わったことは、甚だ不自然である。というのは「茄子」と「天茄」は字が違ふように決して同じ物ではない。にもかかわらず、中尾本を芭蕉自筆として発表した上野洋三・桜井武次郎両氏の『芭蕉自筆 奥の細道』（一九九七年一月岩波書店）の翻刻では、

ある草庵にいさなはれて

秋すし手毎にむけや瓜天茄

と、何の説明もなしに「天茄」の振仮名に「なすび」とある。果

して「天茄」は「茄子」と同じ物であろうか。

この点に疑問を抱いた私は、日本の古代から現代までの「茄子」と「天茄」の用例を探索し、それらが同一であるかどうかを検証した。その結果は「茄子」と「天茄」(平成十一年九月安田女子大学大学院博士課程完成記念論文集)及び「茄子」と「天茄」贅言(同十二月、就実語文二十号)に詳述しておいたので、右の論文を参照せられたいが、結果的に言って、「茄子」と「天茄」が同一であることを論証することができなかった。しかも日本人で「天茄」と書いた例は中尾本以外に発見されなかった。従って、「茄子」を「天茄」に言い替えることは無理であり、中尾本を芭蕉自筆とすること自体疑問があると、述べておいた。

その過程で思わぬ副産物もあった。明の李時珍撰の『本草綱目』の後を受けた清代の『本草綱目拾遺』に「天茄」の項目があり、これは「茄子」とは全く違ったものであったが、その注に「天茄」は蠹毒を治する膏藥であるとの記事は全く思いやらない発見であった。これは『五雜組』に見えるところであった。『五雜組』は明の謝肇淛撰の雑録書で、日本には寛文元年の和刻本によって広く知られていた。「天茄」と言えば、当時の人々は植物としてよりもむしろ漢方薬と心得ていた可能性が高い。こうしてみると「天茄」は、ますます「茄子」から離れていく。

## 二

こうした私の研究に対して、反論として、金子俊之氏の「新出本『奥の細道』研究史概説―付・研究文献―覧」(近世文芸研究と評論六十号平成十三年六月)が発表された。

ところで、赤羽・松本阿氏の論文で取り上げられた「瓜天茄」という表記について若干検討しておきたい。

まず表記の問題であるが、これは阿氏が広く当時の文献を調べられ、「天茄」という表記そのものがあることは確認されている。なお、私に調査したところ、阿氏の指摘にない用例として、『三才節用集』(藁水編・元禄13年刊。『青木鷺水全集第一巻』昭和59年・ゆまに書房、所収)巻之一に、「イ天茄ウ天茄子 同上 一名苦瓠」とあるのが目に入ったので、ここに掲げておく。

次にその実体であるが、結論から言えば諸書の記述は不統一ではつきりしない。ただ、少なくとも「茄子」とは別物であるようだ。それを赤羽氏は指摘し、「ナスビ」と読む根拠が裏証されない限り、「天茄」を芭蕉のものとして信ずることとはできない」と述べて、芭蕉自筆説への反証としたわけである(「茄子」と「天茄」『安田女子大学大学院博士課程完成記念論文集』平11・9)。しかし、よく考えてみると、この論理は、芭蕉のみならず、芭蕉と同時代のすべての人間に、

「天茄」を「ナスビ」と読む根拠がなかった、とも言えるのではないだろうか。氏が想定する「初稿らしく見せるために、わざと特殊な字を使つて細工を施した人物は、どのような根拠によつて「ナスビ」に「天茄」の二字をあてたのか、ということを考えてみればよい。論証として十分であると筆者には認められないのである。

『三才節用集』に「天茄子」と並んで掲げられている「竜葵<sup>リウキ</sup>」は、『和漢三才図会』には「コナスビ」の名称で出る（巻九十四の本・湿草類）。説明部分を抜粋して読んでみると、  
龍葵 老鴉酸漿草 老雅眼晴草 水茄 天茄子 苦葵 苦菜 天泡草

本綱二、龍葵ハ四月ニ苗ヲ生ズ。嫩キ時食フベシ。柔滑ニシテ漸ク高サ二・三尺、莖ノ太サ筋ノ如シ。燈籠草ニ似テ毛無シ。葉ハ茄ノ葉ニ似テ小サク、（中略）其ノ味ハ酸ク、中ニ細子有リ。亦タ茄子ノ子ノ如シ。（以下略）

△按ズルニ、龍葵（和名古紫須比）莖・葉ハ葵ニ似テ、子ハ茄子ニ似テ小サク、故ニ龍葵・天茄ノ名有リ。（以下略）とある（原漢文）。記述に多少のゆれはあるが、全体として「茄子」よりひとまわり小さいもの、と理解される。つまり、「コナスビ（龍葵・天茄）」「小茄子」である。とすれば、「天茄」に「ナスビ」の読みをあてたということも全くあり得ないことではないのである。

山本・赤羽の両氏が以上のような方法を用いて新出本芭蕉自筆説への疑義を呈してきたのは、「書風」という、主観の入り込みやすい方法に比べて、より客観的な論証が可能であると考えられたからであろう。しかし、これまで述べてきたとおり、芭蕉自筆説を根拠から覆すだけの説得力を有しているとは言い難く、方法論に限界のあることを感じさせる現状となつていふことを感じさせる。（、は原文）

この金子氏の私に対する批評は、必ずしも当を得たものではない。その一つとして資料の扱いが正確ではなく、部分的にしかみていないということが指摘できる。例えば、青木鷲水の『三才節用集』に「龍葵<sup>リウキ</sup> 天茄子」の例を発見されたことは珍とすべきだが、その引用が正確でない。改めてそれを引き直そう。

竜葵<sup>リウキ</sup> 多識<sup>タシキ</sup> 天茄子<sup>テンカシ</sup> 同上一名 苦藟<sup>クレイ</sup>

金子氏の引用では「多識に出たり」の割注が抜けている。これは「竜葵」の和訓の始めを知る上で重要な注である。「多識」は林羅山の著「多識篇」のことである。寛永七年に古活字版が出ていて、この中には明の李時珍の「本草綱目」から多数の用例が抜き出されてそれに万葉仮名で和訓が施されている。古辞書大系『多識編自筆稿本刊本三種研究並びに総合索引』（中田祝夫・小林祥次郎解題、昭和五十二年三月、勉誠社）によって、次に影印を示す。

羅浮涉獵抄多識編（自筆本）慶長十七年

茄なす

古活字本多識編 寛永七年刊



龍葵古茶須比今茶伊奴保豆岐龍葵 昔葵

整版本多識編 寛永八年刊

茄那須比龍葵 落蘇 拾遺 野葡萄 野草 龍葵

苦茄 拾遺

改正増補多識編 寛文十年前後の刊

龍葵龍葵 茄那須比今茶伊奴保豆岐 昔葵 増補 昔葵

茄子 水茄 天泡草 老茄 龍葵 老茄

眼晴草

以上、林羅山の『多識編』の変遷によつて「茄」と「龍葵」の差が明らかになり、殊に「改正増補」版によつて、「龍葵」が「天茄子」であることが、証明される。尚「茄子」の読みが「キヤス」であつたことが知られる。これは唐音である。古活字本が「龍葵」を「古索須比」「伊奴保豆岐」というのもこれが最も古く、「コナス」とは寛永十四年版の和刻本に見える。「イヌホフツキ」は貝原益軒の寛文十二年版の校正本に「龍葵」とある（「天茄」の

正体「文学・語学一七〇平成十三年九月」これらによれば、「龍葵」といえば日本ではむしろ「ホフツキ」に類するものとして認識されていたのではあるまいか。「コナス」とを金子氏が正徳二年の「和漢三才図会」をもつて論じられたのは、全く時期遅れの資料を用いたといわねばならない。

「天茄」の図は、寛文六年刊中村惕齋の「訓蒙図彙」に次のようにはつきり示される。「茄子」との差を明らかにするために、両者を上下に掲出する。図は、「近世文学資料類従・参考文献編4」（原本所蔵者横山重、編者近世文学書誌研究会、解説並びに索引作成者小林祥次郎、昭和五十一年一月刊勉誠社）による。

天茄てんか

こかしは茄子也 龍葵 昔葵 老茄 眼晴草 並同

茄か

おかしは茄子也 又名落蘇 酸漿 銀茄 今按多るふい 水茄 今按多るふい



右によつて「天茄」と「茄」がどれ程違ふか明白であらう。ついでに説明を翻字しておく。

天茄 てんか こなすび天茄子也

龍葵 りゅうき 苦葵 くき 老鴉眼 らうあがん

晴草 せいそう 並同

茄 か なすび茄子也又名落蘇

醋酥 くそ 一〇銀茄今按しろなすび

○水茄今按ながなすび

「眼晴」の「晴」は「晴」が正しい。金子氏は「こなすび」と「なすび」の名前の類似から「天茄」に「ナスビ」の読みをあてたと云われるが、これだけ違ふ物が混同され得るであらうか。実の大きさを較べても明白である。「コナスビ」の「コ」は「茄子」よりひとまわり小さいものといった意味ではなく、本物とは違つて似而非なるものとするべきである。「龍葵」を「イヌホフツキ」と言っている「イヌ」に相当する。「イヌザクラ」の「イヌ」、「大筑波」の「大」も同じである。

芭蕉が李時珍の『本草綱目』を見ていたことは、延宝八年秋の『田舎の句合』に、

#### 第六番

左 農夫

俗にいふうぶめ成べしよぶこ鳥

(前略) 又、うぶめ、李時珍が説に姑獲鳥とかけり。鳥

と云字によせて、おもひ出られ候にや。(下略)

とあることによつて明らかである。「姑獲鳥」は、『本草綱目』禽部目錄第四十九禽之四山禽類十三種附一種の内に載る。其角の句は、

姑獲鳥産婦所化、陰慝為妖。

によつたものである。其角の父東順は医者であり、其角自身も医術の心得があつたので、本草学には詳しかったものとみえる。其角は「呼子鳥」を子と呼ぶ鳥と解し、それをお産のために死んだ産婦「うぶめ」であらうと想像し、芭蕉は即座に李時珍の『本草綱目』に見える「姑獲鳥」であると応じた。この丁々発矢の師弟と想像したのは、『本草綱目』の和刻本に「姑獲鳥」に和訓がなかつたので「成べし」と推量せざるを得なかつたのである。ここから想像されるのは、其角も芭蕉も少くとも、『本草綱目』の和刻本は見えていたであらうということである。芭蕉は藤堂家の料理人であつたから、食品に対する知識として、本草学に造詣が深かつたものと察せられる。従つて中村惕齋の『訓蒙図彙』なども座右の書であつた可能性も高い。その芭蕉が「茄子」に似而非なる「天茄」を「茄子」の代替に用いるとは考えられない。

### 三

『本草綱目』の和刻本は、寛永十四年版、寛文十二年の貝原益

軒の校正本の二種類を見てきたが、正徳四年の稻生若水の校閲本はまだ紹介していなかったのここに明らかにする。所蔵は岡山大学で、函架番号は499・9R書庫である。大きさはタテ24cmヨコ17.5cm和綴本で、左上の題簽に「本草綱目新校正序目」とある。内扉には、次のようにある。

稻生若水先生校閲

本草綱目

附 本草図翼  
結髮居別集

書林 含英  
豫章 堂藏板

この裏に次のようなこの校閲本の趣旨が書かれている。

新校正本草綱目五十三卷

係ニ稻生若水先生正シレ字ヲ訂スルレ訛ヲ之本ニ如ニ草ノ部之佳草  
果ノ部之没契離ノ一旧本俱ニ脱漏ス 今為ニ補入ヲ 至テハニ於  
蟲魚草木之類ニ一名称伝レ訛ヲ承レ舛ヲ其遺コト害ヲ非レ淺ニ為  
ニ之ヲ釐正ヲ皆出ニ於先生平日所ニ考據確認スル 与ニ坊間  
所レ行之本一大ニ有ニ逕庭ニ 誠ニ成ニ医学ノ津筏ヲ兼ニ資ニ博  
雅ノ大観ヲ云

本草図翼四卷

結髮居別集四卷

右計六十一卷

正徳甲午年端午日

これを要するに、本書は、稻生若水が「本草綱目」の従来本の脱漏を補ったものであるという。稻生若水の伝記は前記「天茄」

の正体」の注に示しておいたが、ここに河出書房版「日本歴史大辞典」第一巻（昭和四十七年二月）所載のものを転記する。

いのうじやくすい 稻生若水 いなふじ やくすゐ

一六五五—一七一五 江戸中期の本草学者。江戸の人。名は義、字は宣義、また彰信、通称正助。医師恒軒の子。一歳で大坂にゆき古林見宣に医学を学び、また福井徳潤に本草学を、京都の伊藤仁齋に儒学を学んだ。博物学を志し、ひろく読書ならびに实地調査を試み、薬用となる動物鉱物で中国の書物に記されており、日本に産するもの一、二〇〇余種を調べた。一六九二（元禄五）年「物産目録」一卷を著わした。

翌年加賀金沢にゆき藩主前田綱紀に禄二千俵で召抱えられ、その援助をえて本草学の研究を集めた大著「庶物類纂」一、〇〇〇巻の著述に当り、生前三六二巻を完成した。また一六九五（元禄八）年には「食物伝信纂」一二巻を編し、一七〇九（宝永六）年には新井白石の依頼により「詩経小説」を著、一七一四（正徳四）年「新校正本草綱目」五三巻を翻刻。翌年京都で没し、洛東迎称寺に葬る。「庶物類纂」は幕府にも献ぜられ将軍徳川吉宗の命により門弟丹羽正伯により完成。他に「本草図翼」「結髮居別集」「炮灸全書」野呂元丈らがあら。↓庶物類纂（藤谷俊雄）

稻生若水の正徳四年の「本草綱目」に「龍葵」は、草部目錄第十六卷草之五隰草類七十三種に収められ、



龍葵 ウシホウツキ

とある。これは新出の和訓であるから、写真版を左に示す。

龍葵 日本 校正 併入 關澤老  
 採名 唐 經苦菜 天茄子 經水茄 網 天泡草 網  
 老鴉酸漿草 日 老鴉眼睛草 其性滑如紫也

茄 朱開寶



『本草図巻』卷三菜部



『本草綱目図』第十六草部 隔草類下

茄



『本草綱目図』卷二十八菜部 蔬菜類

「ウシホウツキ」の「ウシ」は、「イヌホフツキ」の「イヌ」と同じで、似而非なるものを表す接頭辞であろう。上の中央の図は附録に示された「図巻」のもので、「茄」の実が大きいものであることを示すために特にここに載せた。その左の上下も「龍葵」に「天茄」とあることと「茄子」との比較を知るために対比した。和刻本では「天茄」の読みは、『多識編』以来、「コナスヒ」「イヌホフツキ」「ウシホウツキ」の三種であることが知られる。

貝原益軒の『大和本草』の「唐がき又珊瑚茄」の条に、これを稲生若水が「天茄子」と言ったという説が見えるが、「ウシホウツキ」との関係は不明である。この「唐がき」は今で言う「イチジク」のことであろう。

四

日本で「天茄」(或は「天茄子」「天茄児」)がどう読まれたか、またその実体は何か今までに判明した分を列挙してみよう。

- (1) 寛永七年 林羅山『多識篇』龍葵ーコナスヒ・イヌホツキ
- (2) 寛永十四年 和刻本『本草綱目』龍葵ーコナスヒ・ホフツキ
- (3) 寛文元年 和刻本『五雜組』天茄ー蒿菜
- (4) 寛文六年 中村惕齋『訓蒙図彙』天茄ーテンカ・テンキヤ・コナスビ
- (5) 寛文十二年 貝原益軒校正『本草綱目』龍葵ーイヌホフツキ
- (6) 元禄十三年 青木鷺水『子節用集』竜葵ー天茄子ーイヌホツキ

(7) 宝永六年 貝原益軒『大和本草』龍葵ーコナスビ・イヌホウツキ  
(8) 同 唐がき・珊瑚茄ー天茄子 (稻生若水説)

(9) 正徳二年 寺島良安『和漢三才図会』丁香茄ーチョウウジナスビ・ツルナスビ・天茄児ーテンカジ

(10) 同 龍葵ーコナスビ

(11) 正徳四年 稻生若水校閱『本草綱目』龍葵ーウシホウツキ

(12) 宝暦八年 倉敷自然史博物館よりの教示 天茄ーハリアサガホ

(13) 宝暦十三年 平賀源内『物類品鑑』天茄子・丁香茄苗ータウナスビ・丁子ナスビ (宝暦八年薩商東部に齎し来る)

(14) 同 東壁 白牽牛子ー天茄子

(15) 安永六年 加地井高茂『薬品手引草』天茄ーテンキヤ 三種同名壁柿・白牽牛子・老鴉眼暗艸

(16) 享和三年ー文化三年 小野蘭山『本草綱目啓蒙』牽牛子ー丁香茄児ー天茄児

(17) 同 サンゴシユナスビを天茄子と言ふは誤なり。天茄子は龍葵にして和名イヌホ・ツキなり。(白井光太郎校註『大和本草』の頭注に引かれた小野蘭山の説。)

(18) 文政四年ー天保十三年 屋代弘賢『古今要覧稿』あさがほ牽牛子、丁香茄児 一名天茄児

(19) 昭和五十七年 牧野富太郎『原色牧野植物大図鑑』イヌホオズキー漢名龍葵

以上を纏めると、江戸初期から現代まで一貫しているのは、『本

草綱目』の「龍葵」の別名を「天茄」と言い、「イヌホフツキ」「コナスビ」「ウシホフツキ」などと呼ばれた雑草で、「子」はほうずきに似るがそれとは別種で、また「コナスビ」とも呼ばれるが、それとも別種であり、有毒である、というのである。もし芭蕉が「コナスビ」の名に惹かれ「茄子」の代りとしたならば、芭蕉の句は「手毎にむけや」とあり「コナスビ」では皮を剥く対象にならない。やはりこれは大型の「ナスビ」でなくてはならない。次は、今のイチジクのことである「唐がき」別名「珊瑚茄」を「天茄子」と言ったとする稻生若水の説であるが、この根拠は確認がとれていない。『薬品手引草』の「壁柿」がこれに当るであろう。第三は、『和漢三才図会』にのる「丁香茄」で、これを「ちようじなすび」「つるなすび」と呼び、「天茄児」とも言われるが、説明は明の『農政全書』或は『救荒本草』からの転写で、当時まだ日本には渡っておらず、平賀源内の『物類品鑑』が言うように、宝暦八年に薩商が江戸に齎したと言う白牽牛子がこれに当るのであるまいか。源内は「タウナスビ」「丁子ナスビ」と言い、この「丁子ナスビ」が『和漢三才図会』のそれに一致する。倉敷自然史博物館で標本を見せられた「ハリアサガホ」もこれに一致する。

大体「天茄」は右の三種類に分類されるが、芭蕉以前で芭蕉が知ったのは「龍葵」の別名としての「天茄」であろう。以上植物としての「天茄」の外に、膏藥としての「天茄」も見逃せない存



在である。こうした幾種類もの「天茄」の中から「茄子」の代替として「天茄」を特定することは殆ど不可能である。中尾本『奥の細道』に「天茄」と書いた人は、既に金沢で芭蕉が「瓜茄子」と詠んでいたことを知らなかったのであろう。「天茄」は今の辞書には載せられていない特殊な植物名で、これを書いた人は『奥の細道』を初稿らしく見せるために、あえて世に知られぬ「天茄」を用いたのか、そう悪意的ではなく、たまたま目にした「天茄」を「茄子」の代りに使ってみただけなのか、その辺の消息は不明としかいいようがない。いずれにせよ、芭蕉は「天茄」の正体をはっきり知っていた。その芭蕉が金沢でよんだ「瓜茄子」を『奥の細道』の初稿に「瓜天茄」に改める必要はさらさらない。これが誤りとして曾良本の訂正で墨の見せ消ちの形で正されたのは当然である。中尾本を自筆とする立場に立つならば中尾本に誰もが書けない「天茄」が書かれているのであるから、それは芭蕉の筆に違いないという理屈も成り立つが、芭蕉がわざわざ「天茄」が「茄子」でないことを知っていながら、「天茄」と書く必然性は考えられない。もとどおり「茄子」で一向にかまわないのである。「天茄」が「茄子」でないことが判明したからには、少くとも「天茄」を「ナスビ」と読むことは止めてほしい。事実には合わないのである。

(あかはね まなぶ 安田女子大学大学院教授)